

体育とスポーツの混同が起きる背景～わが国における体育・スポーツ観から～

The background of reason for confusion of physical education and sports ～From the viewpoint of physical education and sports ideology in Japan～

1K04B205-1

本目 哲也

指導教員

主査 友添秀則先生

副査 木村和彦先生

1 本研究の動機

現代のわが国においてスポーツは繁栄を極めてい
る。テレビでは毎日スポーツの中継放送やスポーツ
番組がながされ、新聞の一面にスポーツがのるこ
ともあり、スポーツを知らない、などという人は
いないだろう。そして、体育を知らない人もい
ないであろう。だが、体育とスポーツの違いに
ついてわかる人、考える人はどれくらいいるの
だろうか。私も大学に入学するまでは特に意識
してこなかったし、説明を求められてもはっき
りと答えることができなかったと思う。

「国民体育大会」や「体育の日」といったこ
とばはあるが、「国民スポーツ大会」や「スポ
ーツの日」ではいけないのだろうか。問題ない
のでは、とも感じるが、そのはっきりとした理
由はわからない。「スポーツが精神を鍛える」と
いったことばを聞くこともあるが、そもそも
スポーツとは何なのだろうか。

現在、わが国においてスポーツの大衆化と高
度化、両者の振興を図ろうという流れがある、
そもそもスポーツがどういったもので、それが
私たちとどのような関わりがあるのか、とい
うことが話し合われた経験をもつ人がどれく
らいいるのだろうか。

そこで体育とスポーツの混同されてきた背
景について詳しく調べてみたいと思い、この
テーマに決めた。

2 本研究の目的

本研究の目的は以下の三点である。

- ・ 体育の概念形成の過程についてあきらかにする。
- ・ スポーツとは何かということ、文化・そしてプレイ論からあきらかにする。
- ・ 体育とスポーツがなぜ混同されてきたのかということ
を考察する。

3 本研究の方法

本研究は文献購読によって行う文献研究である。
また、インターネットに公開された文書や資料も一
部参考にする。

4 本研究での用語の略記について

日本のことを「わが国」と記載する。

5 本研究の限界

本研究において、第一節で体育の概念の形成過
程についてふれているが、これは明治期以降の
ものをあつかっている。

本研究において、「保健」は扱わないものとする。

本研究において、主にプレイ論からスポーツとは
何かということについてふれている。

6 各章の概要

第一章

この章ではわが国における体育の概念が形成さ
れた過程について述べた。体育の一つ目の概念は、
三育主義の背景に教養ある市民という理念があ
ったことから「身体教育」という概念が形成され
た。二つ目の概念である「運動教育」は、富強主
義的国民教育の目的実現の方法の一つとして生
まれた概念であった。三つ目の概念である「運
動」が生まれた要因は、二つ目の概念である「
運動教育」がとりいれた競技運動の本質という
内的要因、時代背景である富強主義という外
的要因の二つが考えられる。

第二章

英語と日本語のスポーツ概念は、非常に隔た
った内容を持っており、これはスポーツが受け
入れられていくその概念形成の過程によって
生じたと考えられる。

人間が社会生活を営む上で形成され、継承さ
れてきたものが文化だとすると、スポーツもこ
の文化の範疇にはいることは間違いない。そ
して、スポーツの独自性は「人間的運動」に
結びついた文化、ということである。

プレイ論の立場からみると、スポーツはプレイ
の性格をもっており、その本質は遊びである。

第三章

わが国では「体育・スポーツ」という用語が
用いられてきたが、これは徐々に減少して
いくと思われる。

スポーツが体育の手段となり、学校教育のな
かに押しとどめられ、文化としての成熟度は
遅れた。教材としての扱い方もスポーツ観の
形成に大きく影響した。また学校教育のなか
でも、コーチへと変貌した教師によってスポ
ーツ、体育の混同はおきてしまうだろう。

結章

体育とスポーツの混同が起きないためには、
文化としてのスポーツの成熟が必要である。
そのために私たちは、スポーツとは何か、
ということを考えながらスポーツに参加する
という、本当の意味でのスポーツの大衆化を
すすめるべきであろう。